

2006年12月11日

都城市長 長峯 誠 殿

DOCOMOMO Japan 代表  
鈴木博之

### 都城市民会館保存要望書

拝啓

時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。本会は、20世紀の建築遺産の価値を認め、その保存を訴えることを目的のひとつとする、世界43カ国が加盟している近代建築保存の非政府国際組織 DOCOMOMO (Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of Modern Movement =モダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査及び保存のための組織) の日本支部です。

都城市では、新たに建設された「総合文化ホールMJ」の完成に伴い、1966年に建てられた旧都城市民会館の今後の使用に関して検討を加えられている旨を聞き及びました。ここに、その建築的価値を明記した保存活用の要望書を提出させていただきます。

都城市民会館は日本のモダニズム建築を代表する建築であり、その建築的価値は下記の2点に集約されると考えられます。ひとつは、戦後日本の建築界において展開されたモダン・ムーブメントの重要な一面を担った“メタポリズム”の建築理論が具現化された作品であること。第2点は、“メタポリズム”を標榜するグループの中心的役割を担ってきた建築家・菊竹清訓の思想が端的に表現された建築であり、その造形は極めて独創的なものであるという点です。

1960年代は“もはや戦後ではない”という合言葉で始まりました。50年代からの急速な技術革新に支えられた高度経済成長によって、60年代前半には社会全体に高揚状態が訪れ、64年の東京オリンピックにおいて絶頂期を迎えました。建築分野においては『国立屋内総合競技場』(1964年、丹下健三)は戦後の日本建築が世界のレベルに追いつき、追い越したことを象徴する建築となりました。戦後建築のリーダーともいえる丹下健三に続く世代として登場したのが、1960年に日本で開催された世界デザイン会議を機に設立された“メタポリズム・グループ”です。“メタポリズム”とは、生物が新陳代謝を繰り返しながら成長する仕組みを、都市や建築の構想に取り入れようとするユニークな建築理論であり、当時

は世界中から注目を集めました。欧米の影響下に近代化を進めてきた日本の建築界から、世界の建築界に向けて新しい建築理論を発信した初めての運動であったといえます。

都城市民会館を特徴付ける特異な建築形態は、メタボリズム・グループの中心的立場にあった建築家・菊竹清訓の新しい建築理論から生まれたものです。菊竹は、建築や都市の計画において“変わるもの”と“変わらないもの”とを明確化することを意図し、都城市民会館においては、事務室等を含む鉄筋コンクリート造の基壇(不変)の上に、取替え可能な鉄骨造の屋根を載せるという形状を採用しています。この屋根形状は、敷地地盤の悪さから、柱を減らし、扇の要のところにて全ての力を集中させることから発案されましたが、さらに徹底して、空調や照明等の設備面においても、全ての力を一点に集中させることを意図しています。加えて、建築を構成する全ての要素を露出し、視覚化するという斬新な発想から、“三半規管”の渦巻き型を髣髴させる、独創的な建築形態が生み出されました。その力強い姿は“ヤマアラシ”の愛称として親しまれています。

都城市民会館は 1960 年代の高度成長期の日本だからこそ可能となった前衛的で実験的な意味合いの強い作品といえます。メタボリズムは、一般には未来主義的な志向と捉えられていますが、近年は、可変的なシステムを導入することで、使い続けてゆく日本的なライフスタイルを追求する運動であったとの再評価も生まれています。それゆえ、竣工時より屋根の雨漏りのトラブルが生じるといった不幸な経緯にもかかわらず、その後 40 年の長きにわたり、市民の方々に愛され続けてきたことの意義は極めて重要であるといえます。

この前衛的建築を使用され、今日まで維持されてきた都城市民の方々の努力に敬意を表するとともに、今後もメタボリズム(新陳代謝)理論の良き実践例として、是非存続に向けご検討くださいますようお願い申し上げます。

なお DOCOMOMO Japan の活動に関しましては、補足資料を同封いたしましたので、ご参考にしていただければ幸いです。

敬具

ドコモモ (DOCOMOMO=Documentation and Conservation of buildings, sites and neighbourhoods of the Modern Movement)

### モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織

ドコモモは、20世紀の建築における重要な潮流であったモダン・ムーブメントの歴史的・文化的重要性を認識し、その成果を記録するとともに、それにかかわる現存建物・環境の保存を訴えるために、オランダのアイントホーヘン工科大学のフーベルト・ヤン・ヘンケット教授（現デルフト工科大学教授）の提唱により1988年に設立された国際学術組織である。その会員の専門分野は、建築史研究者だけではなく、建築家、建築エンジニア、都市計画家、行政関係者など幅広い。

1990年にアイントホーヘンで第1回の総会が開催され、その後拡大を続けて、2003年現在、44か国に支部（"Working Party"と呼ぶ）がある。第2回総会は1992年ドイツのデュッセルドルフのハウスの校舎で行われた。第3回（1994）スペインのバルセロナ、第4回（1996）はスロバキアのブラティスラバ、そして、第5回（1998）は、スカンジナビア諸国5カ国の共催により、スウェーデンのストックホルムで、第6回（2000）は、ブラジルのブラジリア、第7回（2002）はフランスのパリで、第8回（2006）はアメリカのニューヨークで、第9回（2008）はトルコのアンカラで開催された。

ドコモモ本部 (DOCOMOMO International) は最初オランダ・デルフトに置かれ、2002年からはフランス・パリにある。会長は2002年に、ヘンケット教授からイタリアのマリステッラ・カッシアート教授に代わった。

第1回総会で、ドコモモの理念や活動についての宣言が採択され、以下のような活動目的が確認された。

1. モダン・ムーブメントの建築遺産の重要性を、一般市民、行政当局、専門家、教育機関に広めること。
2. モダン・ムーブメントの建築作品の調査を進め、広げること。
3. モダン・ムーブメントの建築貴重な作品の破壊と破損に反対すること。
4. 資料調査と保存のために基金を誘致すること。
5. モダン・ムーブメントに関する見識を広め、探求すること。

ドコモモは、モダン・ムーブメントやその成果に関する参加各国の多様性を尊重しつつ、2年に1回の総会に合わせたシンポジウム、機関誌"DOCOMOMO Journal"の年2回の刊行を通じての情報提供、4つの専門分科会ごとの研究・議論、個別の支部が開催するシンポジウムの案内などを行って、モダン・ムーブメントの成果やその保存の重要性についての啓蒙活動を続けてきた。これまでの活動で特筆すべきものは、各国に現存するモダン・ムーブメントの好例20件を選定して、2000年に"The Modern Movement in Architecture/ Selections from the DOCOMOMO Registers" (edited by D. Sharp & C. Cooke, O10 Publishers) にまとめて出版したことである。そのもとになっている現存リストは所定フォーマットに従って蒐集され、オランダの建築博物館 (NAI) が管理し、公開やさらなるデータ整備・蒐集に向けて準備が進められている。

なお、近代の建築に関するユネスコの世界遺産選定の動きに関連して、ユネスコとの協力関係模索の動きもある。

ドコモモの日本支部 (DOCOMOMO Japan) 設立の動きは、1997年にはじまり、先述の DOCOMOMO20 選のために1998年に日本建築学会の建築歴史・意匠委員会内に設けられたドコモモ対応ワーキング・グループを母体に組織を整え、2000年のブラジリア総会で DOCOMOMO の正式メンバーとして承認された。

日本支部は2000年に、同支部選定の DOCOMOMO20 選についての展覧会やシンポジウムを独自に開催し、2003年には20選に80件を加えた DOCOMOMO100 選を発表して展覧会を開催、2006年に15選を選定して115選にするなど、積極的な活動を続けている。そのメンバーには、DOCOMOMO の趣旨に沿うべく、建築史研究者とともに建築家や構造エンジニア、構法の研究者も参加している。